

新たに教職員になったみなさんへ

早く行き詰まること

松伏町立松伏第二小学校 教諭 関目 智史

——「皆さんには、早く行き詰まってほしい。」

本年度採用された皆さん、おめでとうございませう。子ども達との出会いから2か月ほど経ち、どのようにお過ごしでしょうか。

冒頭の言葉は、私が初任者の時に指導教官に言われたものです。この言葉を聞いた時、戸惑いました。「えっ?」と思いました。がむしゃらに頑張った1学期の授業と学級経営の、実践や反省点を踏まえ、2学期からの展望を発表した直後だったからです。

「思い通りにいかない自分のクラスと、上手くいっているクラスとの違いは何だろう?」という思考が始まるからです。早く行き詰まって、成長してほしい。」それがその方のメッセージでした。

「なるほど。」と思いつながら、その言葉を

ノートにメモしたことは、時間と共にすっかり忘れ去り、2年目が終わりました。そして私にとって3年目となった4月当初、資料を漁っていた時にこの言葉と再び出会いました。

「ああ、行き詰まった。学びの年だったな。」心からそう思いました。学級経営で苦しい思いをしたからです。

2年目の私は、意気込んでいました。根拠のない自信。「自分がこの子どもたちを変えてやる」と、「笑顔のクラスにしよう」と、熱意のかたまりでした。あるいは、「自分ならこの子どもたちを変えてあげられる」といった驕りも、思い返せば多分にありました。

1学期が始まってみると、初任者のクラスで出来たことが通用せず裏目に出たり、

自分の思いばかりが空回りして、子どもとの関係が上手く作れなかったり、子ども同士の間が悪かったり。毎日喧嘩が起きていました。

「何がいけないんだろう。どうすればいいんだろう。」そんな思いが渦巻く中で、私は日々の悩み、喧嘩対応、先輩教員との相談の記録、指導の反省等を必死で書きとめました。それを続けていく中で、少しずつ次年度に改善していきたいことが見えてきました。1年間でメモしたノートは12冊以上。

こうして行き詰まり、苦しんで身に刻まれたものがあるからこそ、今年はさらなる前進の年になると信じています。

臨時採用で経験がある方も、新卒で採用された方も、これからのいろいろなことに直面すると思います。その全てが成長のチャンスだと私は思っています。子どもから、先輩教員から、あるいは研修から学ぶ様々なことを、成長の糧にしていけるよう、一緒に頑張っていきましょう。

頑張ることは大事、休むことも大事

特別支援学校大宮ろう学園 中村 一幾

私は現在、正規採用の教員として勤務をして2年目になります。それまでは非常勤、臨任と6年間ずっと高校で勤務をしてきました。今回、初任者の方へのメッセージということで原稿の依頼をいただきましたが、正直何か伝えられるほどの経験もしていないので、私の昨年の体験についてお話ししたいと思います。

昨年4月、やっと合格したんだから、今まで以上に頑張るぞと強い気持ちを持って着任しました。初めての手話の世界で、授業中に生徒がわからないことがつかめず、話していることがわからず、悩んでいます。手話が出来ないぶんは教材でなんとかするしかないと思い、休日返上でパワーポイントを作って授業をしていました。また、授業の前には必ず1時間の流れを手話で確認していました。

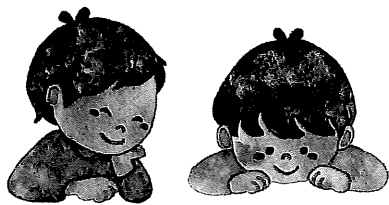
平日は21時過ぎ、休みの日も16時くらいに帰るそんな生活を続けていたある日、手話を見ていたらめまいに襲われ、気持ち悪

くなり手話を見ていられなくなっていました。幸い次の日には治りましたが、その後も原因不明のじんましんが出たりという日々が続いていました。さすがにこのままでは自分が倒れてしまうと思い、勇気を持って土日は休むことにしました。

その後、めまいに襲われたことはありませんし、じんましんが出ることもなくなりましたが、もし、休まずに頑張り続けていたらどうなっていたのか想像するだけでも恐ろしいです。もしかしたら、身体からのSOSだったのかもしれない。もちろん、頑張ることを否定する訳ではありませんし、状況によっては休むことが厳しい方もいると思います。ただ、夢を持って教員になったのに頑張りすぎて自分の身体を壊してしまい、働けなくなるのはとても悲しいことです。

良い教育をするために研修をうけたりや、教材研究をすることは大切ですが、それ以上に教師が心に余裕を持って生活する

ことも大切だと思います。ただ、教師がゆとりをもって生活をするためには超過勤務の解消は、喫緊の課題ですし、それは個人の意識だけで解決する問題ではありません。今後も抜本的な超過勤務の解消を求めていくとともに、リフレッシュ出来ることを探すことや、それを共有できる仲間や、パートナーを見つけて、今まで以上に充実した教員生活を歩んでいきたいと思えます。



真新しい教師の皆さんに

獨協大学 川村 肇

皆さんは子どもが好きで、子どもを幸せにしたくて教師という道を選んだのでしょうか。皆さんの素晴らしい選択を心から祝福します。しかしこれから皆さんが出会う困難を前にした時、その最初の皆さんの願いが本物かどうか、これから試されていきます。そして教えるという仕事は、その試練の連続といってもいいかもしれません。

教師は精神的労働でもありながら、最も拘束労働時間が長い職業です。学級定員の多さに加えて、膨大な事務仕事に忙殺されます。大切な授業の準備の時間すら取れないのが実態です。忙しさは教師間の人間関係を直撃し、管理職との間にも同僚の間にも軋轢を生みだしてしまいます。子どもが好きで選んだにもかかわらず、その子どもとかかわる時間の少なさときたら！子どもたちも競争させられて、子ども同士の間関係も良くないことがあります。子どもとかかわる時間が少ないので、じつくり話し合ったり悩みを聞きだしたりする時間も

中々取れません。それで学級の運営もうまくいかないことがあります。心配になった保護者の方々は黙ってはいないでしょう。管理職も守ってくれるとは限りません。管理職によるパワハラすら少なくないといえます。精神疾患がこれほど多く報告されている職業はないそうです。

こうした困難を目の前にした時、皆さんは常に試されています。

学級が荒れている時、学級をいわゆる「スタンダード」にするためには、子どもを押さえつけ「締め」れば「シャン」とします。子どもの言い分など聞かずとも、威圧すれば上辺は「キチン」とするでしょう。同僚や管理職の目も気になりますし、保護者からのクレームはうんざりです。ついついそういう管理的な態度に走ってしまうのも分からないではありません。けれども、そのとき教師は子どもの側に立つことをやめているわけではありませんか。

皆さんは子どもを成長・発達させる専門

家として、保護者からその教育権の一部を信託されて子どもを教えています。管理的で威圧的になるのは簡単ですが、教育の専門家がとる道ではありません。子どもにとつての先生は、一生涯、親以外で最も身近な大人として記憶に深く刻まれます。「いい先生」などならなくても構いません。けれども、その成長・発達に責任を持つ大人として、子どもの側に立ちきった先生でいてください。

そのためには毎日が学びの連続です。先輩の教師や同僚から、教育学の書物から、実践の記録から、そして何よりも目の前の子どもたちから、たくさんのことを学んでそれを血肉にしていってください。血肉になる学びこそ、大学まであまり経験できなかった本当の学びです。学び続けて皆さんの先輩たちは本当の「人の師」となっていくのです。

皆さんのその真新しい決意を日々新たに、教師への道を磨いていって下さい。